



▲煉瓦蔵とこて絵



▲煉瓦蔵とこて絵



▲旧鉾山への道



▲カラミ石の水路



▲郷土芸能記念碑
◀大場から山谷への道
に入っすぐ左手に
建つ田口堅治の功績
を称えた石碑

鉾山から金属を取り出す過程で鉾石を砕いて溶かすと、銀や銅などの比重の重い金属は下に沈み、軽い岩石の成分は浮きます。それがカラミで固めたものがカラミ石です。

明治以降の近代化によって採掘量が増大し、伴ってカラミが増え、箱形に成形したカラミ石を売り出しました。建物の土台や塀、縁石などに活用されました。また、日三市鉾山では煉瓦の製造もされ、角館の店蔵にも使われているようです。

鉾山すぐ下の雫田集落にカラミ石を使った庭や蔵があり、目を引きます。中にはこて絵で飾られた煉瓦蔵も。こて絵は大工職人が仕事させてもらった御礼とか、家主の依頼で描かせたり、一説にはその家の格付けを表していたともいわれ、富の象徴だったのです。

カラミ石と煉瓦蔵：こて絵

日三市鉾山入口の雫田

繁栄の足跡を伝える名残

郷土芸能の盛んな里

雫田の三叉路に郷土芸能記念碑が建っています。昭和五年、東京日比谷の日本青年館で開催された第五回全国郷土舞踊民謡大会に田口織之助一行が出演。飾山囃子の素晴らしさが認められたのでした。美声と独特な節回しが評判だった黒澤三ーや田口幸太郎等の名が刻まれています。角館周辺は民俗芸能の宝庫で、特に中川は盛んです。その開祖といわれているのが「三五郎」こと田口堅治です。父から芸を習い身につけ、長男幸太郎に厳しく教えました。明治三十七年に親子で「三五郎組」を名乗り上げ、囃子方と踊り子の組を完成させます。大場に堅治の功績を称えた「唄と踊りの碑」があります。芸能を愛する中川の気風は、小玉暁村等の尽力によって全国へと発信されていくのです。

鉾山の隆盛と教育環境

明治九年、山谷川崎学校が聖覚院の小屋を仮校舎に開校。後に三省小学校川崎分校所と改め、さらに場所を変えながらも、日三市鉾山の隆盛に伴い、雫田に川崎尋常小学校が建てられました。校舎の完成は地域の悲願でもあったことでしょう。中川小学校川崎分校として閉校するまで、地域の人づくりを担い苦難と繁栄を伝え残してきた学校の歴史は、ふるさとを愛し、感謝することの大切さを、地域の人たちに語り続けていくようです。



▲をカラミ石で囲われた土蔵
▶三叉路の屋敷で長い歴史を見守ってきた巨樹の横の木(右の写真:左)と、そこから
すぐの県道沿いに中川小学校川崎分校跡地の標柱が建っている

経済、芸能がめざましく発展した 日三市鉾山隆盛の時代

参考文献:中川のあゆみ・里かくののだて・角館人物鑑

地域運営体について：仙北市では地域の身近な課題を地域住民が解決するなど、地域住民の自発的、自主的な活動を行う地域運営体の設立をすすめています。市の予算を、特産品づくりや起業などに有効活用することもできます。民分権を進め、行政も含んだ、総合的な仙北市の質を上げることがねらいです。



戦国時代から近代の中川地区
戸沢氏も鉾山経営
戦国時代にこの地方を統治していた戸沢氏。資料には一二二〇年〜一四二三年に小松山城（古城山）に進

中世から鉾山の里？

地域の輝き
磨く人たち
おらほノ魂

特集 第7回

中川地域

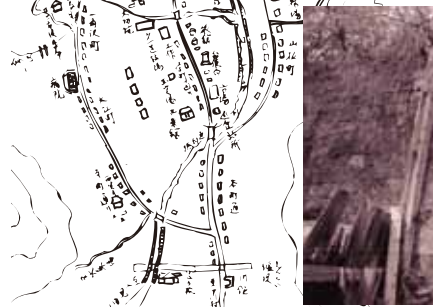
江戸時代から大正は日三市鉾山で栄え、潤いそして北浦民謡の唄や踊りで結ばれ郷土芸能を愛し、今日にその伝統が引き継がれている中川地区。「三省」を校訓とし地域とともに歩み続ける中川小学校謙虚な姿勢と勉学・勤勉、仲間を大切にする郷土愛。歴史を学び新しい産業を興す中川地区運営体を取材しました。



出するまで居城していた門屋城を囲むように、一族や家臣が住んでいたとする城館（支城）が置かれ、中川地区にも、黒沢の横馬（間）館跡や若神子の館腰城のことが口伝に残っています。また、戸沢氏は鉾山経営で富を築き軍事力を高めたとあり、中川を含めて、松木内川沿いに鉾山が多かったことが想像できます。

日三市鉾山
発見された年代には諸説がありますが、江戸時代には佐竹藩が金山として採掘していました。明治九年、政府の民間払い下げで盛岡の事業家瀬川安五郎が荒川鉾山とともに購入。経営は安定していましたが明治二十九年に財閥の三菱に売却。近代化が図られ、明治四十年から大正五年が全盛期だったそうです。五百世帯二千人が住む鉾山町が形成され、病院や

寺院、郵便局、共同市場などがあって活気をみせていたことでしょう。変電所もあり角館の中心部よりも早く文明が進んでいたそうです。明治二十二年、当時の山谷川崎村と川原村、小勝田村の三村が合併して中川村となり、鉾山から毎年のように約七百万、今に換算するとどのくらいでしょうか、大金が村に寄付されていた口伝も残っています。しかし、ヨーロッパ戦争（第一次世界大戦）の戦後の不景気や、大正十二年に死傷者も出た坑内火災に加え、繁華街でも大火災が起こり、こ



れらが引き金となつてでしょうか、この年に山は休山してしまいました。昭和十五年、日三市鉾山の本所となつていた荒川鉾山も廃山し、長い歴史を閉じたのでした。



▲閉山後、かつて働いていた関係者が鉾山跡を訪れ撮影したときの様子



中川小学校で見つけた、謙虚さと勉学・勤勉の伝統

「三省」を小学校の校名に。今は校訓に

中川小学校となる以前の校名が「三省小学校」で、校訓に「三省」のことがありますが。地域住民にも愛され大切にされていることばです。

「三省」の由来は次の通りです。明治八年に吉原学校（私塾）を開設した小勝田村の吉原貞右衛門は、川原村の戸長や山谷川崎村との三村連合区域による小学校設立に尽力されました。その当時の教育は儒学が本流で、「毎日幾度なく自分の身・口・意について反省する」を意味した、論語の「吾日に三たび吾身を省みる。人のために謀りて忠ならざるか、朋友と交わりて信ならざるか、習わざりしを伝うるか」から引用。三村連合も込めて「三省小学校」とし、明治十八年に設立しました。

少子高齢化が顕著ですが「学校が地域に元気を発信。子どもの元気で地域に活力を与えたい。学校が地域拠点の働きができれば」と話す沢屋隆世校長先生。地域交流を



▲沢屋校長先生が先頭となって、地域交流などでイキイキとした元気がいっぱいの学校運営をされています。



▲双方向交流事業の販売体験で、明るく笑顔で対応する子どもたち。



▲創造力がたくましく、季節感でいっぱいの子どもの作品。



▲三省まつりでの元気な子どもたちの発表会。▶レクリエーションと住民の作品鑑賞(下)の様子



深めています。その一つ「三省まつり」では、住民の作品展示発表を小学校の発表会に行い、午後のPTAが主催したレクリエーションにも世代を超えて多くの住民が参加しました。また、地域のボランティアで、子どもたちが田植えや稲刈り、天日乾燥などの農作業体験をし、収穫した新米を「みんなニコニコ米」とネーミングし、双方向交流事業で交流している東京都上板橋で販売体験しました。子どもたちからは「楽しかった」と大変好評で、一年の活動報告としてPTAで発表される予定です。

地域を語る「三省」のことばから、真心と仲間意識、責任感、習うことの大切さを感じられ、謙虚さと一生懸命さが伝わってきます。地域に見守られながら社会でも挨拶する子どもたち。沢屋校長は「交流の輪をもっと広げるため、住民の皆さんにも学校施設を利用してもらいたい」と、地域へ感謝の気持ちでいっぱいでした。

三省まつりや農作業体験…

地域に「元気」を発信 交流を深める地域の拠点に

地域の活性化のために 学校は地域がつながる拠点

今年四月に設立した中川地区運営体。会長を務める小玉久視さんは、高校卒業以来三十五年ぶりに地域に戻り、「自分が子どもの頃は、小学校一クラス五十人くらいいたが、今は全校で五十人程度」と、児童数の減少をさみしく感じています。

少子化は時代の流れ。ならばと、積極的に子どもたちとふれ合う機会を小学校に相談。地域との交流を積極的に進めたい沢屋中川小学校長の想いと合致し、「三省まつり」(学習発表会)にあわせて地域の文化祭を合同で行うことを企画しました。

「三省まつり」に多くの地元住民が参加しています。「小学校にある設備も開放してくれる。学校を核にして地域活動していきたい」と、学校との連携をさらに進めて、地域の活性化に取り組みます。

さらに小玉会長は「運営体はやること、みんなが参加できることからやっていく」と、無理をせずに活動している様子で、案内看板設置事業で地域の一体感に手応えを感じ、「今後は便りのようなものを発行して、運営体の動きをもっと知ってもらえればさらに良くなると思う」と、今後の取り組みを話してくれました。

「赤そば」で元気づくり

活動八年目の角館そば生産組合(鈴木秀夫会長)では昨年から赤そばの栽培に取り組みんでいます。品種は「高嶺ルビー」で、食用はもちろんですが、赤い花による景観の美しさで知られています。

組合事務局長の山本實さんは「手のかからない作物とはいえ、最近の悪天候には苦労している。赤そばの花が咲く畑を観ながら食べてもらいた



調べて学ぶ

歴史文化の継承保存事業で、中川の歴史を調査している田口武彦さん(写真右)と戸沢正隆さん。「地元にながら、わからなかった部分も出てくると思うので非常に楽しみにしている」と話し、郷土史の発行を3年計画で行っていきます。

地域の案内看板

環境整備事業として19ヵ所に設置した地域の案内看板が好評です。現在地の地名のほか、他に他地区の方向も記したおかげで、地元以外の方も迷わず移動できている模様です。地区の皆さんにとっても安心です。



中川地域運営体



会長◆小玉久視さん

中川地域運営体 平成23年度の事業概略

- 地域内環境整備事業
 - 地域案内標識板の新設
- 地域安心・安全対策事業
 - 災害発生時対策として発電機の備え付け
 - ※ 地域拠点施設(6ヵ所)
- 地域歴史文化の継承保存事業
 - 中川地区の歴史を調査・保存する
- 地域の活性化事業
 - スポーツを通じた、子どもと地域住民が交流するための用具購入
 - 中川小学校の「三省まつり」(学習発表会)にあわせて、地域住民が多く参加できるような文化作品の展示会の実施



角館そば生産組合事務局長の山本實さん

秋田県仙北市